

十字架のイエス・ベネディクト修道会

修道院便り

2019年クリスマス / 2020年新年



《聖母子像》

欠畑美奈子氏作



「聖母子像」制作者紹介

欠畑美奈子（カケハタ ミナコ）氏、1934 年盛岡生まれ。

叔父は「長崎 26 殉教者記念像」を制作した、戦後の日本を代表する彫刻家の一人である船越保武氏（1912 年岩手県一戸 - 2002 年東京）。盛

岡白百合学園を経て 1953 年、岩手県立美術工芸学校油絵科卒業。以降、聖母マリア像や聖人を題材とする数多くの彫刻、木彫を手がけ、日本内外の教会や修道院、施設のために制作・設置。1986 年、岩手県優秀美術選奨受賞。1998 年には花巻市萬鉄五郎記念美術館で「岩手の現代作家、重石晃子・欠畑美奈子展」を開催、2016 年には同美術館の「いわての立体造形展」では船越保武、健次郎の舟越兄弟の作品と共に欠畑氏の「母子」と題される作品が紹介された。にじみ出る気品の備わった優しい表情、美しい木彫の線が特徴的である。

主のご降誕と新年の お喜びを申し上げます。



2019 年も主のご降誕を迎え、新しい年を迎えようとしています。今年も皆様からの物心両面の温かい御援助、本当にありがとうございました。

さて今年は 9 月と 10 月に大型台風の影響で各地に甚大な被害が発生しました。お蔭様で私たちには目立った大きな被害がありませんでしたが、被害に遭われた多くの方々に思いを馳せております。

3 月 25 日には Sr マリア・イグナチア塩澤幸子が萱場神父さまと野口神父様の共同司式のミサの中で初誓願を宣立する恵みと喜びがありました。姉妹の歩みのためにどうぞお祈りください。

本修道院便りのテーマは「信仰への道のり」として、それぞれ自由に日頃の思いを書きました。

教皇フランシスコの来日で今年は日本の教会にとっても記念すべき年になりました。私たちも教皇の意向にそって、世界平和と地球の命のために心から祈り続けたいと思います。

来る年もどうぞよろしく願いいたします。

希望のうちに心からの感謝を込めて

平和の元后修道院 姉妹一同

若き日の夢

Sr.Veronica 高橋和子



熱心な仏教徒の家庭に生まれ、キリスト教のことは何も知らなかった私。中学生の頃抱いていた夢は、尼さんになって、あまり便利ではない辺ぴな村に行って住み、その人びとと苦楽を共にしつつも、祈りの内に静寂な日々を送りたいと思っていました。

これは、たぶん同郷の宮沢賢治の本などに影響を受けていたのでしょう。

キリスト教を学び、修道生活に惹かれる様になり、聖書を読んでいたある日次の場面に出会いました。

アマレクがレフィディムに来てイスラエルと戦ったとき、モーセはヨシュアに言った。「男子を選び出し、アマレクとの戦いに出陣させるがよい。明日、わたしは神の杖を手にとって、丘の頂に立つ。」

ヨシュアは、モーセの命じたとおりに実行し、アマレクと戦った。モーセとアロン、そしてフルは丘の頂に登った。モーセが手を上げている間、イスラエルは優勢になり、手を下ろすと、アマレクが優勢になった。モーセの手が重くなったので、アロンとフルは石を持って来てモーセの下に置いた。モーセはその上に座り、アロンとフルはモーセの両側に立って、彼の手を支えた。その手は、日の沈むまで、しっかりと上げられていた。

ヨシュアは、アマレクとその民を剣にかけて打ち破った。

(出エジプト記 17,8-13)

聖書のこの言葉に出会ってからは祈りを中心にした修道生活を望むようになり、今の修道会に召され、50年の歳月が流れました。これまでに、どれだけの方々に支えられ、祈っていただいたのかしれません！

心からの感謝をこめて。

導かれて

Sr 服部美智子



「求めなさい。そうすれば与えられる。探しなさい。そうすれば見つかる。門をたたきなさい。そうすれば開かれる。誰でも、求める者は受け、探す者は見つけ、門をたたく者には開かれる。」（マタイ 7：7－8）

私は自分の生涯を振り返ってみて、このみ言葉がピッタリだと思いました。

私の青春時代は、人生の目的、将来のこと等を考えて、あまり希望のない日々だったように思います。

その頃、友人の一人に何か良く分からないけれど、惹かれる人がいて、良く話し合っ分かったのは、彼女が教会に通っていることでした。私は確固としたものを求めていたので、教会に連れて行って欲しいと頼みました。

次の日曜日、彼女に連れられて教会に行き、始めて御ミサというものに与りました。お年寄りや子供達も交じって、皆一生懸命賛美歌を歌っていました。そして“主の祈り”「天におられる私たちの父よ・・・」を聞いた時、強い衝撃を受けました。神である天の父は私たち皆のお父さんであることを知ったからです。そのことは私に大きな喜びと平安をもたらしました。

それからは、毎日曜日教会に通い要理の勉強をして、主イエス・キリストのことを知るようになり、生きる希望がでてきました。教会では、主任司祭を始め、信者さん達が温かく迎えてくださって、すぐにその中に溶け込むことができました。それで教会に行くのが楽しみになりました。

ある日、教会の図書で「リジューの聖テレジア」の自叙伝を見つけ、夢中になって読んだ後、私の生きる道はこれだと確信を抱いたのです。そして洗礼を受け、主任司祭に修道生活を望んでいることを話すと「受洗後3年は待ちなさい」と言わ

れました。

3年は長いなあ～と思いましたが、いろいろ準備が必要で、先ず日本に100以上ある女子修道会のどこに入会出来るのか調べたり、家を離れたことの無い私を、母が許してくれるかが危ぶまれるし、と問題はあるですが、何故か私はあまり不安はなく、神が取り計らって下さるという神に対して強い信頼のうちに、自分に出来ることをしながら、その時を待っていました。

その内、本会のことを助任司祭が教えて下さり、フランスの本会の総長とも連絡を取って下さり、数ヵ月後入会することが出来ました。

これまで、多くの方々のお祈りと援助によって、支えられ助けられたことを深く感謝しています。

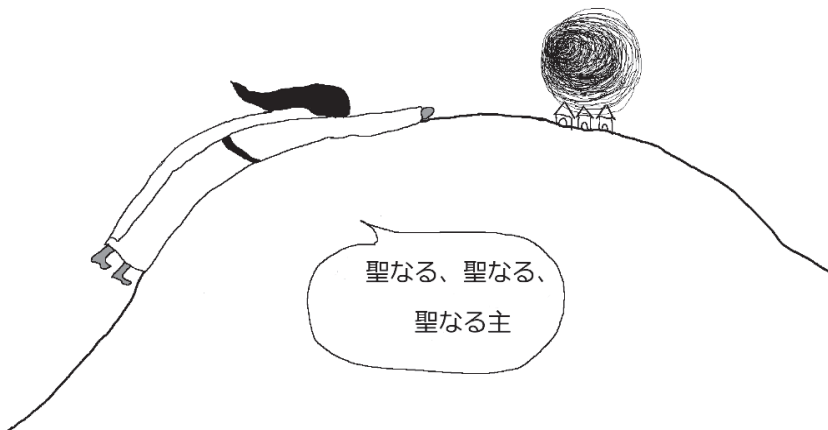
“喜びに心をはずませ、神の家に行こう！”



一老修道女の祈り

Sr. 関雅枝（フランスの共同体から）

今の時代、まだ 80 代に至らないのに老修道女などと云えば生意気と思われるかもしれない。私自身気持ちだけはまだまだと感ぜないわけでもないが、曾孫がいてもおかしくない歳だし、身体障害の不自由を持っての人生だからそう言っても許していただけるであろう。それにここ数年私より若い姉妹や友人を天にお返ししていることも自分の位置を自覚させるのかも知れない。徐々に現役を退いて本来の務めに選任できるのはうれしい。私たちの日中は午前 7 時の読書課に始まり賛課、聖書深読、六時課、ミサ、晩課、念禱そして終課とがっちり祈り時間の配分があって、祈りの生活を生きる者に与えられた特権を生きる恵みを頂いている。先輩の姉妹たちは 90 代の後半に至っても聖務の大部分に与っていて、それは彼女たちの喜びであると同時に、あとに続く私たちの励みとなっている。



ところで今回
分かち合いたい
のはその枠の外
に置かれた祈り
のことで、存在
による祈り、つ
まりただいるだ
けの祈りと執り
成しの祈りにつ
いてである。

まず、ただい
るだけという祈

りについてすこし分かち合ってみよう。「ただいてくれるだけでいいのですよ。あなたの存在は私の喜びなのですから」…愛し合っている 1 人がその相手に抱くこのような想いや、障害を持つ子供への両親の気持を物語っているこのことばは誰もが

理解できると思う。同じ言葉を造り主であり救い主である方がわたしに言うておられるとき、更に「ただそばにいてください。私があなたにるように、あなたも私にいてください」と言われるとき、私は、そしてあなたはどの様に应じるのだろう。ひとはよく眠れぬ夜を苦に思うらしい。眠らないと明日に響くという。私は神経の病気を患っている人のことを言うてはいない。病気の人にはそれなりの理由があるのだから私は彼らの苦しみに深く一致している。それはさておきわたしの睡眠の波にはちょっとした穴があって、寝つきはあつという間に来るのだが、ぐっすり眠った後目が覚め、それから3、4時間覚めたひと時を過ごす喜びを与えられているのだ。もう随分長くからのこの習慣が私は大好きである。身体は眠っているらしく動かないのだが、精神と心は確かに目覚めている。ある時は宇宙に飛び出したような感じ、5億光年からの光を見ながら、大きい大きい宇宙のなかにいる。またある時は花婿を待っている花嫁（マタイ25章）のよう。あるいは愛する人が起こしてくれるのを待つ雅歌の乙女のよう。もちろんいつもそんなにいい気持ちだけではなく、厚い霧の中で息苦しさを味わう時もあるのだが、とにかくわたしという感覚が鮮明ではっきりしている。深さにも差があるが、私はすべてを置いてただ偉大な方の中にいるだけ。言葉なく感情も騒がない。じっと何も考えずただ目覚めているだけのそうした時を私はこよなく愛している。睡眠時間が削られているのに疲労せずかえって元気をいただくのだ。

もう少し意識の位置が浅くなってくると、「執り成しの祈り」に招かれるように思う。言葉をもって主におねだりす場所に至る。日本の教会は祈りを口語文にしたようだが、幼い時から言い慣れている上、フランスで一人祈ってきたので、私は相変わらず「公教会祈禱文」の言葉を使っている。そのほうが自然に口に上ってくるからでもある。

朝まだきにわが心、主をあこがれてめざむ。イエズス・キリスト祝せられ給え。イエズス、マリア、ヨゼフ、この日と一生をみ手に委ねたてまつる…こんな調子で延々と、平和を願い、教会の一致、世界、近隣の国、日本の国のため、福音が地の果てに及ぶことを願い、若者たち、神学生、司祭方、司祭職を放棄した方、家族の

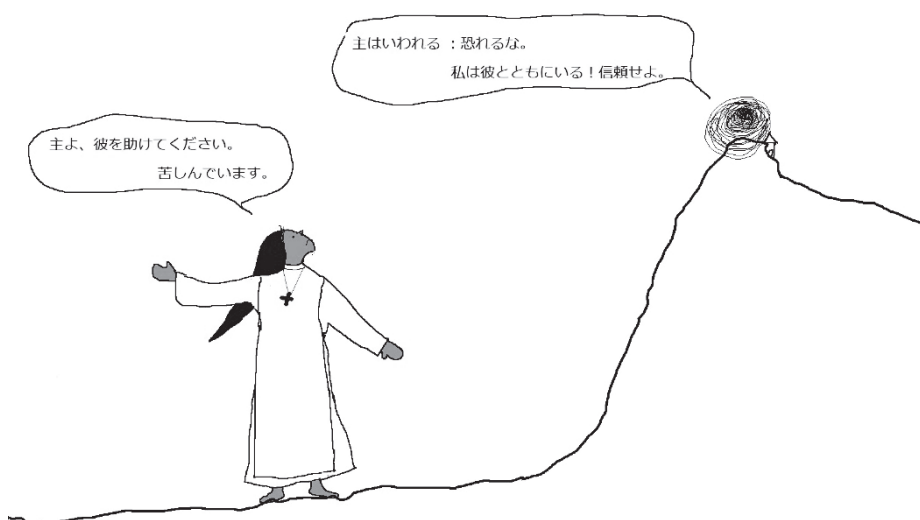
ため、心にある方々や祈りを約束した方、祈りを依頼された方一人一人のお名前をあげて、さらに病気の方、苦しんでいる方、本会のためにも祈り続ける。

そして、日によってもう一度うとうとするときもあるが、そのうちに夜が明けるから、その前に体と呼吸の体操をするのだが、私はこれも存在の祈りと思っている。病気の進行を少しでも遅らせ、主を賛美するのに必要な力を養い維持するものだから祈りと言えるのではないだろうか。起床の鐘がなって姉妹が私をベッドから引っ張り出し、身支度を整え、朝食を済ませると早一番の聖務時間というわけだ。毎日こんな風に過ぎていく。

共同体での祈りの枠の外にある祈りについて書いてきたので最後にひとつ付け加えるなら夕寝の前今度は教会の伝統に基いて神の母に私の願いを委ね、祈りを約束した方々と 私の回心のため祈ることを忘れていないと記したい。いつまでこのよ

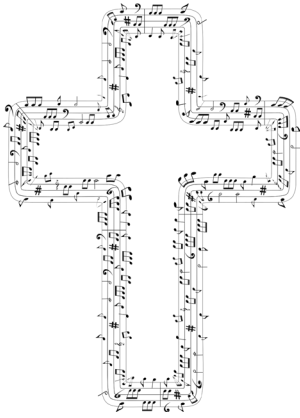
うな生活が許されるのか知らない。でも今日は今日の心配で十分と聖書も言っているのだからそれでよい。そして修道院便りの文もここで終止符ということにしておこう。

メルシー！



聖務日課

Sr.赤井幸子^{ゆき}



本会は「聖ベネディクトの戒律」に従って“神の業^{わざ}”を唱える。

ミサ、朝の祈り、昼の祈り、夕の祈り、寝る前の祈り、読書の祈りと一日6回聖堂に集まって、心と声が調和するように祈り、決められた総則に従う。詩編のテキストには賛美、感謝、嘆願があり、聖書のみことばを聞き、キリストの体全体の名によって、さらにはキリストご自身として唱える。

今の世の中で、大きな災害とか暴力、病気、不正や対立悪がはびこっている中で、嘆願の祈りをする。詩編の中には、前半嘆きと苦しみが、後半になると賛美に変容されていくのがある。神は、今あるがままの世界の中で、救いのために働いておられることを信じ “神の勝利の時を早め、賛美することによって、救いの力を解き放つ” と。

時として、心が声についていけない日もあったり、畏敬の念を忘れたり、体調が悪かったり、思い煩いや心配に引きずられて祈れない時もあるが、年の黙想や「読書」や様々な出来事を通して、神の導きのうちに、新たに生き直し、又来る日も来る日も祈り続ける。

教会は「神の栄光の賛美の民」あり、「民は神を賛美するために創造された。」（詩編102）というみことばに励まされて私たちは教会の中でこれからも大切な聖務の祈りを日々続けていきたいと思う。



わたしとみ言葉

Sr. 金井玉枝



小さな店がまばらに立ち始めた蓮根、中央商店街の市民会館で、宣教師が英会話を教えると聞き、当時小学生だった妹と私は、こんな田舎町で英会話が習える幸いに喜んで行ってみました。東大生が一人来ていましたが、次の授業からは宣教師を我が家へお誘いして、店の2階の座敷で授業が再開されました。

“In the beginning, God created the heavens and the earth.”

（初めに、神は天と地を創造された）と読まれるのを聞きながら、聖書も神もそして英語もおぼつかない、私たちには何のことかわかりませんでした。これが私が最初に出会ったみ言葉でした。

その後、明治学院の教科書に引用されている英語の聖書に触れる機会はありませんでしたが、それは私とは関わりがあるとは思っていませんでした。卒業後の将来に不安を抱えながら過ごした時期で、上野毛のカルメル会の一部屋で信者さんにレポートの代筆をしていただきながら、静けさの漂う修道院を訪ねたのは初めてでした。そして半年後に、そこで洗礼の恵みをいただき、生きがいを見出し、神父様の紹介で本会を知り、修道生活を考え始めました。

毎朝、実家の近くの蓮根駅から始発電車に乗りカルメル会の6時半のミサにあずかりました。

1984年の春、終生誓願前の一か月の黙想を一人でしたとき、前もってご受難会のR神父様からいただいたイザヤ書49章を一人で祈っていた時、パノラマのような光景が眼前に広がりました。それは、イエスが捕囚民を率いて荒れ野を進んでいて、私を招き、イエスと私が両側から捕囚民を挟むような形で、解放の地へ向かう光景でした。

私は初めてイエスから、同伴するよう招かれているという喜びを味わいました。

今も、み言葉を通して、イエスが毎日ご自身を私に表し、喜びと力をくださっています。



思い出すことから

Sr.大場幸子^{さち}



「私、これがいい。」「私はこれにします。」小学校2年生の時だったと思う。新しい洋服を作るために渋谷のデパートに買いに行った。何階か階下の周りには家の屋根が見えたから3、4階だったと思うが東側の一角に洋服生地が反物として並べてある売り場があった。

花柄模様の布地も決まり、私はその場から少しさがって待っていた。すると左のほうから背の高い女の人が左右を細い鋭い目つきでジロツ、ジロツとしっかり見ながら歩いて来た。その人は斜め右前に私がいるのに気が付くと、きつい顔がゆるんだ。それから姉の左側にピッタリ寄りついて、すぐにその場を足早に去っていった。

姉は支払いをしようとバッグに手を入れたが、お財布がない！ 売り場の人に、「その生地の中にお財布が入っていませんか。」、と尋ねたがなかった。

あの女の人はずりだったのだと初めて分かった。「帰ろう。」と姉が声を低くして言った。私たちは無言のまま階下まで行き、ハチ公の銅像の側にある交番に行って姉が事情を話した。私と妹は外で待っていた。もしお巡りさんにあの女の人の人相を聞かれたら、はっきり答えることができたが、何も聞かれなかった。

姉が交番から出てきたので、バスに乗って帰ってきた。多分、バス代もあのお財布に入っていたと思う。

翌日、交番から電話があって、盗まれたお財布がお手洗いにあったということで姉がとりに行った。こんな悲しい出来事を思い出しながら、今年の修道院便りのテーマにしようと決めた数日後、マンションに住む人が1億円余りの貴金属の盗難にあったという新聞記事にびっくりしてしまった。宝石商の災難、企業、商売で騙された人達、さまざまな災難にあった人達は、その大、小にかかわらず、悲しく、複雑な気持ちに沈むにちがいない。

“盗むな” イエス様がおっしゃっている。(マタイ19、18)

聖ベネディクトの戒律 第4章 善いおこないのための道具について 5節
“盗まないこと” とある。(古田暁訳 すえもりブックス)

旧約、新約聖書においても何度も記されているこのみことば。悪を重ねていると、心は鈍くなり、益々、悪の道に深く落ちこんでいくにちがいない。その人達は、そう生きざるを得ないのかもしれないが。

イエス様の忠告を心にしつつ、今、悪に染まっていこうとしている人々のために祈り続けている。



苦しみから喜びへ

Sr.船田由美



28才の時、心は何によっても満たされず苦しみました。母の信じていた宗教の本を読み続けるうちに光をいただきました。「神様を信じて生きることはなんと幸せなこと!」その宗教団体で祈り、学び、愛行をする幸せな日々でした。でもその幸せは長くは続きませんでした。「由美ちゃんは神の子さんよ、素晴らしいのよ」と、いくら言っていたいでも自分の心を見ると暗闇があります。その事を話しても誰も答えて下さいませんでした。私は再び苦しみ始めました。そして、そこにはどうしても行けなくなりました。

そんなある日、街を歩いていると後ろから声をかけられました。「あなたを姉妹と思い信号の所から追いかけて来ました」と。その方は統一協会のいとうさんというかたでした。聖書と塩狩峠を読むように勧めて下さいました。塩狩峠を読み終えて深い感動と共に「どうして自分の命を知らない人達の為に犠牲に出来るのだろうか?キリスト教ってどんな教えだろう?聖書には何が書かれているのだろうか?」そんな疑問が私から離れなくなりました。

その頃はまだ自転車に乗れていましたので教会を訪ねはじめました。教会って入りにくい所だなあと思いました。そんな時、カトリック松山教会の書店に「マザー・テレサの映画の券あります。」との掲示を見、すぐに券を求めて観にいきました。塩狩峠を読み終えた時と同じ感動と疑問が心に広がりました。私は早速、松山教会を訪ねヴィセンテ神父様から公教要理を学ぶようになりました。神父様が伊丹に行かれた後はルイス神父様が教えて下さいました。17:30からのミサに与るよう勧めていただき私は毎日与りました。

いつの頃からでしょうか、聖体拝領前の信仰告白、「主よ、あなたは神の子キリスト、永遠の命の糧、あなたをおいてだれのところへ行きましょう。」を心をこめて唱えている自分に気づきました。それは大きな恵でした。その頃は、まだ母には教会に行っていることは内緒にしていました。母が留守の時に聖書を読んでいた。ある日、エゼキエルの16章を読んでいる時、そこで神様と出会ったと思いました。

「死にかけている私を生かし、育み、私がどんなに罪を犯しても赦して下さいる御方」と。教会のことはもう心の中にしまっておく事はできなくなり、ある夜、思い切って言いました。「母ちゃん、私、カトリック教会に行きよんよ。本当に幸せよ!」「由美ちゃんが幸せなんようわかつとったよ。」私は驚き、嬉しい思いで胸がいっぱいになりました。

そして、1980年12月24日にサトルニーノ神父様から洗礼を授けていただきました。私が新しい命に生まれる時、そこに母もいてくれました。

私は受洗前から、松山教会の神父様、信徒の皆様によくしていただきました。育てていただきました。洗礼の恵みをいただいてからは、こうして一筋の道を歩ませて頂いています。心からの感謝です。

神よ、今日わたしの身に起こるすべてのことは、
あなたが永遠の昔からわたしの善のために予見し、
備えてくださっていたものと信じます。
永遠のはかり知れないご計画を尊び、
あなたへの愛のために、心を尽くしてこれに従います。
また、わたしの全てを、神である救い主イエスのまったき奉獻に合わせてさ
さげます。
救い主のみ名により、また、その限りない功しによって願います。
あなたのはからいによって起こることはすべて、
あなたのより大いなる栄光と、わたしの聖化のためになるよう、
労苦に際しての忍耐と、神への完全な従順の恵みをお与えください。



みことばに導かれて Ⅱ

Sr.鈴木喜代



「来てみなさい」 あの年の1月初め、年末から修道院での黙想、体験を終え、帰ってきた私は教会の主任司祭の許へ行ったのだった。

「どうだった？」と、私の顔をのぞき込んで、不安げな表情で聞かれた。不安げだったのは、ご存知ない修道会であったので確認の仕様がなかったからでしょう。
「はい、良かったです。これから少しずつ準備していこうと思います。」と私。

これは修道院の2階の階段、踊り場から外を見ていて “ 来年の今頃はここにいます ” と内なる声を聴いたからだった。

こうして、6月に入会した。この時、喜んで送り出してくれた神父さまからのメッセージは詩編37：4～6

主に自らを委ねよ
主はあなたの心の願いをかなえてくださる
あなたの道を主にまかせよ
信頼せよ、主は計らい
あなたの正しさを光のように
あなたのための裁きを
真昼の光のように輝かせてくださる

修道生活という未知の道を歩もうとしている私に、このみ言葉はどんなに助けられ支えられたか計り知れない。

何かある度に、このみ言葉の一言に留まり、祈り、落ち着くと次に向かって行った。この繰り返しで来たように思える。

こうして年を重ね、この5月に初誓願から25周年を迎えたのでした。大きな節目だが、日常生活は変わることなく聖ベネディクトの言う愛の学び舎で姉妹達と共に、変ることのない神への道を歩んでいる。

あなたの御言葉は

私の道の光、私の歩みを照らす^{ともしび}灯（詩編119）



宝 物

Sr.Maria 洋子（穂積洋子）



私は家からあまり遠くない、プロテスタント教会付属の幼稚園に通っていました。当時の私にとっては、幼稚園の敷地は広大で大きな樹木が何本もあり、すばらしい遊び場でした。初日こそ大泣きしたそうですが、慣れてくると友達もでき、楽しく通園していました。

いつ頃からか、子供たちのための日曜学校にも通い出しました。牧師先生（園長先生）の、子供のための聖書物語は大好きでしたし、先生の奥様が弾いてくださるオルガンに合わせて歌う「こども賛美歌」も大好きでした。今でもこれらの歌を空で歌うことができます。

しかし何と言っても楽しみだったのは、「出席ノート」です。これは小さなノートで、日付とカードを貼る欄があって、毎週日曜学校でもらうカードを糊付けしてゆくようになっていました。カードはごく小さなものでしたが、必ず短い聖句（聖書のことば）が書いてあり、その句にふさわしい絵が描いてありました。芸術的なものではありませんでしたが、いい加減なものでもなく、子供の心を養うものでした。でもこのカードをもらうには、ただ出席するだけでは不十分で、テストに合格しなければならなかったのです。次の週のカードに書いてある聖句を暗記していつて、一人ずつ皆の前で暗誦するというものでした。

聖句自体はごく短いものでしたから暗記するのは幼稚園児でも簡単にできるものでしたが、小心者の私にとっては大変な試練でした。皆の前に一人で立って、先生に「さあ、言ってごらん」と言われると、一瞬頭の中が真っ白！同じ句を皆が繰り返しているのだから、ただそれをオウム返しに言えばよいだけなのですが、胸はドキドキし、まるで世界中の人の目が自分に集中しているようで、全然声が出ません。すると先生が、そっと耳元ではじめの言葉をささやいてくださり、そうするとやっ

と、ほとんど誰にも聞こえないようなか細い声で暗誦することができました。情けないことに毎回この繰り返し。それでも先生は、「ああ、よくできたね」と言って、カードを手渡してくださいました。

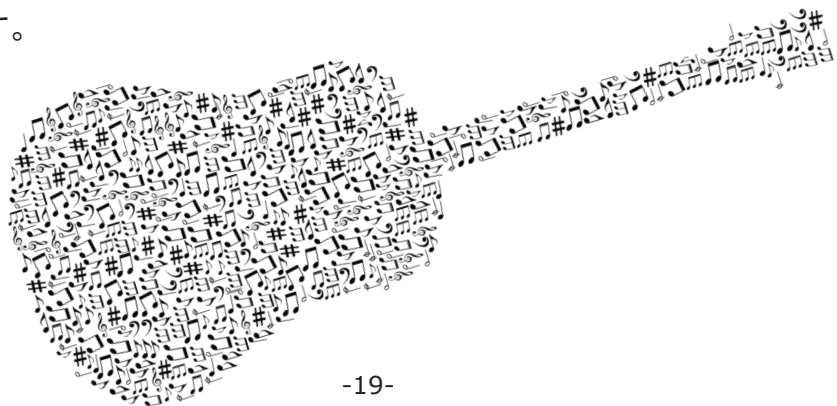
このような具合でしたから、私にとっては一枚一枚の小さなカードがほとんど無限の価値を持ったものとなり、それだけにノートに貼り付ける時の喜びは大きかったのです。そしてまた次の日曜日のために一生懸命聖句を暗記し、毎回冷や汗をかきながらも、戦利品のカードを持ち帰りました。そして毎日、それを眺め、幼いながらも味わっていました。

カードの絵はたいていイエスさまで、その中の一枚が特別に私のお気に入りのものでした。それはイエスさまが一人の子供の頭に手を置いておられるもので、今でもはっきり覚えています。それからいろいろなイエスさまの絵を見ましたし、名画と呼ばれるものにも触れましたが、幼い日の心をときめかせてくれたあの絵には再び出会うことはありませんでした。「出席ノート」も何回か引越しをしているうちに手元から消えてしまいました。

けれどもそれを残念に思ったことはありません。

幼稚園から学校へ、そしてカトリックになって修道院に入りましたが、イエスさまはずっと私と共にいてくださっているからです。祈りはイエスさまとの親しい語らいのとき。部屋で長い間カードのイエスさまと過ごした時と変わりません。何よりもイエスさまは、心の深い平和を通して存在してくださっています。何ものにも替え難いこの心の平和・・・私にとってこれ以上の宝物はありません。

どうかすべての人がこの貴重な宝を見出し、平和と喜びのうちに生きられますように、祈っています。



在りて、あるお方

Sr.Maria光恵 （佐久間光恵）

私にとって、神とは、在るお方です。

モーセがシナイの荒野で主に出会い、「あなたの名は？」と問うた時、
“わたしはある”とお答えになりました。何と不可知で神秘に満ちていることか！

いつも不在の神としか感じられない私ですが、この年まで生きて、その言葉に納得し、信じることができるようになってきました。

しかし、あなたは、この小さな私にとって、いつになっても見えない方、聞きとれない方、触れえない方です。

全てを超え、深遠で極め得ないお方。それでいて、全ての内に在り、支え、保ち、生かしておられる方。あなたを想う時、命のうたが聴こえてきます。

それは、水の流れの音なのか・・・

炎の燃える音なのか・・・

風が揺らぐ音なのか・・・

私には、解りません。

私にとって神は命です。透明な光です。そして、神は、愛、そのものです、としか言えません。語るより黙するほうがふさわしいでしょう・・・

主イエスは仰せになった。「わたしを見た者は父を見たのである。」

愛された罪びと

Sr.Maria Ignatia (塩澤幸子)



今年、11月に教皇フランシスコが日本を訪問してくださるのは私たちにとって大きな喜びです。

さて、フランシスコ教皇と言えば、2013年に教皇がローマ教皇に選出された時、イタリアの雑誌のインタビューで「あなたは何者ですか？」という記者のストレートな問いに教皇は「私は罪びとです」とお答えになりました。さらに「私は主から見つめられている者なのです」と言われたことが思い起されます。

この教皇さまの言葉は、私たちが神の慈しみと愛に満ちた眼差し中で生きる愛された罪びとであることを教えてください。私も教皇さまと同じ、主にいつも見つめられている、主から愛された罪びとです。日々の出来事を通して、自分の罪深さを知れば知るほど、そんな自分をゆるし、生かしてくださった神の愛を深く感じることができるのだと思います。

以前、ある神父さまから愛された罪びとについて、「自分は愛されている」という自覚だけで神からのゆるしの体験をもたない人は、私は特別に恵まれていて、他の人より優れているという優越意識や傲慢になる可能性があることを教えていただきました。逆に、「自分は罪びとだ」という自覚に留まってしまうと、「私はダメ人間だから生きる価値がない、愛される資格がない、私はダメ人間だ」という諦めに陥り、卑屈になってしまうのかもしれません。「私は神から愛された罪びとだ」と心の底から思うとき、傲慢にも卑屈にも陥らず、謙遜になれるのでしょうか。神は私たちが謙虚になり、自分の犯した過ちを認め、悔い改めることに心を向けた時、自分が神の愛によってゆるされていることを実感することができるでしょう。

私にとってこれまでの神からゆるされた体験は、神の愛にこたえたい、神の御心に従いたいという強い望みに繋がっています。日々、数々の失敗や過ちを犯し続け

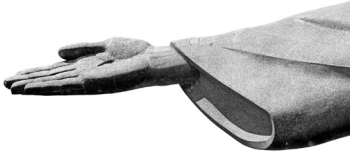
ながら、神の愛の眼差しの中で、神のため、姉妹のため、人々のためにお仕えしていきたいと思います。

最後に、教皇フランシスコの言葉を借りて祈ります。「すべての人が神から必要とされ、愛され、ゆるされていると感じとることができますように」。



イエス・キリストとの出会い

Sr.Francisca（岡島静代）



私は子供の頃、悪がきでした。勉強大嫌い、学校では、先生の教えていることが、さっぱり分からないので、ひたすら黙って下校を待ちわび、家に帰れば妹と取っ組み合いのけんか、近所の同じ悪がきたちとチャンバラごっこや柿どろぼう。そんな私でしたが、意外に！！ 哲学的（？）な女の子でもありました。田んぼの中に一人座って、「あたいは何のために生まれて来たんだんべ」とか「生きる意味って何だんべ？」とか「死んだらどうなるんだんべ。」とか空を見上げながら考えていました。（だんべは昔の群馬弁）

この問いが宗教に関心を持つきっかけになったかも知れません。

私が初めてイエスの名を知ったのは、子供のころ、日曜日になると母がラジオの「ルーテル・アワー」をかけていたからです。朝ごはんを食べながら、自然に耳に入ってきました。イエスさまという人に興味を持ち始めました。高校生の時私は仏教にも関心があったのですが、図書館で見た本はむずかしくてあきらめました。でも、修学旅行で行った京都の小さいお寺の庭に若い尼僧の姿を見た時、「私も尼さんになりたい」と思ったものです。

それに、外国文学を図書館で読むと、聖書の引用が沢山出てきたり、アメリカの女子高校生と文通を始めたら、熱心なキリスト者で宣教に日本に行きたいとか書いてくるので、益々キリスト教を知りたいと思い、友人を誘って、教会に行ってみました。「愛の教え」というテキストを用いてキリスト教の勉強を神父さまから毎週教えて頂きました。その教えは私の心に砂が水を吸い込むように入ってきました。これこそ、私が田んぼの中で考えていたことの答えでした。

神父さまから福音書をいただき、ヨハネ福音書を読んだ時の感動は今でも忘れられません。思わず「この人（イエス）は本当の人間だ、真の人間だ」と叫んでいま

した。真の人間の姿がそこにありました。既成概念や道德にとらわれない、自由な人の姿がそこにありました。心の自由な人、というのは私が最も憧れる人です。福音書の中のイエスは私の心をとらえてしまいました。この人について行けば間違いない、人間の生き方を知っている、と確信しました。神の御子であるということも。その年に洗礼を受けたかったのですが、高校生は両親の承諾が必要でした。両親は反対。そのころ聖ヨハネ23世教皇が逝去したというニュースがテレビで報道されました。そうだ、天国に着く前にこの教皇にお願いしようと、すぐに「神様に会ったら、私が洗礼を受けられるようにお願いしてください。」と熱心に頼みました。しばらくすると、両親は渋々ながら許可してくれました。当時名前しか知らなかったのですが、今でも聖ヨハネ23世は私の信仰の恩人として心に刻まれています。そして16歳の時、洗礼を受けることができました。洗礼式には、子供の頃ケンカした妹が立ち会ってくれました。

洗礼を受けた時から、信仰がいつ、ぐらつくかも知れません。それが心配でしたので、それ以来私はずっと「信仰を強めて下さい」と願っています。

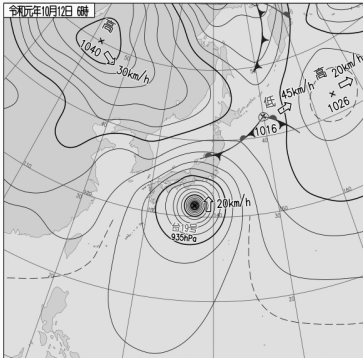
私の一生の宝、私の生涯で最も幸せなこと、それはイエスと出会ったことです。信仰をいただいたことです。どんな辛いことがあっても、イエスは必ずその意味を教えてください。私のこれまでの生涯を深いところで支え、指針を与え続けているのはイエスです。

出来るだけ多くの方がイエスさまに出会えたらどんなに人生が変わるでしょう。私はいつも、そのために心から祈っています。



二つの台風と豪雨 in 令和

Fr.エンマヌエル野口義高（トラピスト）



昨年の今頃は、来年2019年から出発する新元号がどのような名称になるのか、想像の内に予測しながら、子供のようなくわく感と新しい時代を迎えるちょっぴり高揚感の中で年末に向かっていたように思う。年あけて4月1日には、新元号が多くの人が予想しなかった「令和」と発表され、5月1日から予定通り令和の新時代がスタートした。

誰もが自分の生活をリセットすることは至難の業。でも、否が応でも国全体が新しい元号に移行し、毎日の生活は昨日と今日と何ら変化はなくとも、正月をむかえた元旦の朝以上に、理由らしいものをあえて見つけ出そうとすることなく、あいまいな希望と変化を胸に感じたのではないだろうか。そうやって令和元年は船出し、5月、6月と進み、またいつものように夏がやってきた。

ところが、今年の夏はどうだっただろうか。昨年の7月との対比に愕然とする。あまりの酷暑、いや殺人的炎暑で、戸外に出ることさえためらわれた。それがである、今年の7月は全国的に梅雨明けが大幅に遅れ、7月の最終週になって関東はやっと梅雨明け宣言。連日降り続いた雨と晴れ間のない空で、16年ぶりの梅雨寒の7月となった。遅ればせながら8月からは安定した夏空になるのかと期待していたら、見事に裏切られた。突然の猛暑と数日毎に繰り返す大雨が日本中は翻弄された。来夏はオリンピックが開催されるのに、と誰もが迫ってきた現実不安を感じたのではないだろうか。

そして台風が次から次へ発生し、ととぐろのような渦を巻いて日本を襲った。その中でも台風15号、19号は甚大な被害をもたらし、大きな爪痕を残した。令和元年台風第15号は9月5日に発生し、関東地方に上陸したものとしては観測史上最大クラスの勢力で、9月9日に上陸して房総半島を中心に大規模停電、断水が引き起こし、住宅被害は1万棟を超え、亡くなられた方もいる。白子修道院は多少の被害はあったものの、

全員無傷であった。修道院周辺は台風一過の翌朝、いろんなものが道路のみずたまりにふきだまりのようにたまっていたが、目立った被害はなさそうだった。それでもいつもの散歩道を歩けば、あちこちの家屋の屋根瓦が飛んでいるのが見受けられた。海岸沿いの草むらでは、どこから逃げてきたのか一つがいの真っ白な鶏が行き場を失って砂土をつつつきながらうろたえているのに出くわした。また、日中に海岸通りのコンビニをのぞいてみると、駐車場は満車で、店内は何と多くの客で混んでいることか。それも、地元の人だけではなさそう。商品棚はすぐに食べられるパン類やおにぎり、弁当類が空。スナック類もほとんど何も残っていない。冷凍食品だけが少し余っていた。窓側にしつらえてあるイートインと呼ばれるスペースでは家族づれが席を占有し店内で買ったカップラーメンにその場でポットからお湯を注ぎ疲れた顔で黙々と口に運んでいた。行列の並んだレジでは、湯気の立った「おでん」を山盛り買い込んでいる人もいる。店員はレジ打ちを終えるとほとんど「つゆ」だけになった仕切り鍋に追加の具材を追加したり、奥のバックヤードと店内を段ボール箱を足早に運んで忙しそう。在庫のあるものをとにかく全部並べようとしているようだ。後で聞けば、コンビニ以上にドラッグストアやスーパーでは同じ風景が見られたそう。

房総半島南部の状況は回復が日ごとに遅れつつも、台風15号による各地の被害を伝えるニュース報道が一段落ついたように見えていた10月12日、今度は台風19号が上陸し、関東地方や甲信地方、東北地方などで記録的な豪雨災害となり、台風15号を上回る規模の甚大な被害をもたらした。台風15号の後に損壊した屋根の応急処置にかぶせてあったブルーシートが飛んでいるのはまだ軽微な被害だったようだ。9月末に行方不明となった少女の捜索されていた山梨県のキャンプ場は壊滅的だと心を再び痛めるニュースを聞いた。その翌々週の25日、弱り目に祟り目とはこのことかと思わせるほど、今度は台風21号の影響を受け、東海地方から関東にかけて至る所で豪雨による河川の氾濫が起これ、各地で越水や浸水が確認された。白子に隣接する茂原市も一宮川が決氾濫し、茂原教会の信徒さん宅は床上浸水だったと伺った。

房総半島と言えは沖合に暖かな黒潮が流れ、四季を通じて温暖で自然災害に合うことも少ない、と言われてきた。真冬でも雪の積もる日は珍しく、1月から3月にかけては春を先取りする南房総のお花畑は菜の花、ポピーなどで埋め尽くされる。白子でも

2月下旬には濃いピンク色の河津桜が咲き競う「しらこ温泉桜祭り」が開催され、電車もないのにかなりの観光客でにぎわう。遠くにはテニスを楽しんでいるかけ声とラケットでボールを打っている音が響き、目を転ずれば、白サギが大きな羽をひろげて田んぼに舞い降りる、のどかな田舎町である。だが、今回の二つの台風と豪雨は抗おうとしても防ぐことのできない自然災害の脅威と、地球環境に対する人間の責任を痛感させるにあまりあるものであった。まるで地球が身に染みついた汚れを身震いしながら水で洗い流しているかのようにさえ思えた。家屋の損壊被害に遭われた方、亡くなられた方、避難所生活を余儀なくされた方々に私たちは寄り添う者でありたい、そう祈り続ける。



二つの台風の去った後に、気づいたことがある。台風の去った数日後から、宿泊客のいない白子のホテル群の駐車場が多くの作業車でいっぱいになっていたことだ。テニス客のワゴン車や普通車ではない。早朝にいつもの海岸通りをぐるりと一回散歩していると、ホテルの駐車場に日本各地のナンバープレートを付けた大型のはしご車や電源車が駐車しているのに出くわした。朝6時、ホテルの出入り口からは次々に作業服姿のグループが両手にザックや紙袋を提げて出て来て、それぞれの車へ乗り込む準備を始めている。台風15号の時には新潟ナンバーや東北ナンバーが、台風19号の時には関西や四国電力と車体に書かれた愛媛ナンバーも多く見られた。東北電力上越支店、佐渡支店などと社名の記載された車体のフロントガラスには「災害支援車」、「復興支援車」とステッカーが貼られていた。全国から駆けつけてくれたんだ、それがわかった時、思わず目から涙が溢れてきた。不審者に見られないよう帽子を目深くかぶり直し、うつむき加減ですれちがったのだが、心の中では、ありがとうございます、本当にありがとう、と深く礼をしながら言い続けていた。報道はされないかも知れない。でも、被災地のためにこんなにがんばってくれてる人たちがいる。そう思うと、日本はまだ、まんざらでもない、という希望と暖かさを感じた。

激しくアップダウンの繰り返しだった2019年は令和の号砲と共に私たちに多くの出来事を刻み始めた。主イエスが、受難と死と復活を通してただ御父のみ旨を果たす毅然とした決意でエルサレムへの道を歩まれたように、私たちもどのような時であろう

と、主の跡に従うものでありたいと思う。2020年がすべての人にとって祝福された年となりますように。微笑みと涙の向こうに、喜びと悲しみを超えた地平線に立っておられる主イエスに、ともに会いに行こう！





2019年における主な事柄

毎月野口師の講話があり霊的糧をいただきました。

毎月藤岡氏による音楽レッスンがありました。

- * 12月25日～1月24日 ジュリアーノ修道士の滞在と聖書講義
- * 2月25日～28日 Sr.井出によるフォーカシングセッション
- * 3月11日～12日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- * 3月25日 Sr.M.イグナチア塩澤幸子 初誓願宣立 萱場師司式
- * 5月1日～3日 献身者の研修会
- * 5月8日～11日 サレジオ会 マルシリオ師による講義
- * 5月15日 Sr.鈴木喜代、誓願25周年 銀祝ミサ
- * 5月19日 茂原教会との親睦会（修道院において）
- * 5月27日～31日 Sr.井出によるセッション
- * 6月10日～11日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- * 6月28日 布重氏の指導による活元会
- * 7月1日～5日 養成担当者研修会にSr.穂積洋子参加
- * 8月20日 Sr.荻野恭子、施設に入所（白子 はなゆう）
- * 9月4日 木更津教会 巡礼訪問
- * 9月5日～25日 Sr.吹田による3名の姉妹の黙想会
- * 9月18～25日 Sr.吹田、Sr.長谷川による7名の姉妹の黙想会
- * 10月19日 テゼーの祈りの集い
- * 10月28日～29日 杉本ゆり氏によるグレゴリオ聖歌の指導
- * 11月7日 消防署指導による火災避難訓練
- * 11月17日 御宿霊園で墓参ミサ。2名の姉妹参加
- * 11月18日～22日 柳田師によるヴィパーサナ瞑想のセッション
- * 11月25日 東京での教皇フランシスコミサに3名の姉妹参加

十字架のイエス・ベネディクト修道会
平和の元后修道院

所在地 〒 299-4213
千葉県長生郡白子町八斗 1805

電 話 0475-33-3829

F A X 0475-33-7067

H P <http://www.benedictinesjc.jp>